

タルカ ッ ト書簡一訳および註(二)

鈴 木 恒 彌
若 山 晴 子

序

本稿のテキスト および解説・訳・訳文に関しては、「タルカ ッ ト書簡一訳および註(一)」(神戸女学院大学論集, 第24巻, 第3号)において, すでに記した。本稿もこれと同一手続によっている。

註に関しては, 前号とやや異なる点としては, 在神戸・大阪の他の宣教師の報告との比較を重視した。明治8年以降, 次第に宣教師団のメンバーも強化され, 各人が様々な立場から, 同一の問題に関する報告を行なっているからである。

本稿に含まれた書簡は, 神戸女学院が私塾時代から正式の学校に成長した時点より始まる。学校の責任者としてのタルカ ッ ト女史が, すでに「教育」と「伝道」の二元性の問題にゆき当たり, 時には, これら両者が女史の心中に調和して並存し, 時には矛盾として去来するさまを, うかがい知ることができよう。百年余を経た今日にあっても, この二元性は依然として問題点として残されているが, 女史のこの期における書簡中に, すでにその伏線が見られる。

凡 例

- ☆ 書簡左肩の号数は, 米国伝道会 (American Board Commissioners for Foreign Mission) 本部における整理番号である。発信人の書簡の数とは関係がない。
- ☆ American Board Commissioners for Foreign Mission は通例 A.B. C.F.M. と略称される。本文中では米国伝道会と訳した。但し書簡文中で

は簡略に Board あるいは Mission Board と記されていることが多い。Board は単に伝道会と訳出した。なお同じ文中に伝道団とあるのは Mission の訳で、現地の宣教師団を指す。伝道区は、この伝道団の地区別小単位 station の訳語として用いられる。

- ☆ 米国伝道会年次報告 (Annual Report of the A.B.C.F.M.) の略号として A. R. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の月刊機関誌 Missionary Herald の略号として M. H. を用いる。
- ☆ 関係代名詞等にひきいられた節や挿入句等で直接地の文に入れにくいものは () をつけて挿入した。
- ☆ 訳出の際特に補足した語句は [] に入れた。
- ☆ 書簡原文解説の際の判読困難の部分は [.....] で示し、註をつけて説明した。なお、一応解説したつもりであるが場合によっては検討の余地もあるかもしれないという語句には特別な符号をつけず、番号のみを附して註に加えた。

タルカット書簡

1876年10月18日¹⁾～1880年7月5日²⁾

訳

第320号³⁾

神戸 1876年10月18日

クラーク博士様

わたくしの便り〔御入手〕のことお知らせ下さいましてより久しいことでございます⁴⁾。けれどももしわたくしが、この手紙の書き出しに怠慢のお詫びをもって参りませんでも、そちらでは多分これを郵便の滞りのせいとお思い下さることでございましょう。それ故わたくしは、自分がどれほど長く、貴信におこたえいたしませぬまま、また、次の便ではこれを心がけましようと考えながらやって参りましたかにつきまして、思い過ごすことはいたしますまい。わたくしは、わたくし共のホーム⁵⁾の写真をお送りして、多少は御希望におこたえ申し上げたつもりでございましたが、これはお手元に届かなかったのではありますまいか。この便にてもう一枚お送り申し上げます。それから、もう一枚はスカダー夫人⁶⁾に。どうかお手渡しいただきとう存じます。他の方々から、わたくし共の家と学校とにつきまして充分詳しくお聞き及びのことを知りました。これは本当に心地よく、また便利でございます。けれども、どなたも、設計もしくは仕上げに法外な出費をしたと、わたくし共をお責めになるにはあたらないと確信いたしております。土台はもっと高くいたすべきところでしたが、寝

室の多くは二階にございますので、それほど思い残すことでもございません。中国の宣教師方や当地に在る外国人方には、わたくし共の部屋は小さく低く見えるかと思われます。しかしながらわたくし共は、これらは皆当たり前のことと考えております⁷⁾。

わたくし共の家はもうせまくなりました⁸⁾。そしてわたくしは、階上に寄宿舎を備えた学舎を建てるべきか否かにつき、思いめぐらしております。わたくし共は、只今、この家におります**22名**の生徒とこれとほぼ同数の通学生とをかかえております⁹⁾。わたくしは、神戸の娘さんを数名お断わりしてしまいました。と申しますのも、市外からの者がもう**2名**は確実にやって来るようになっておりますし、おそらく、ほかにもまだ居りましょうから。わたくし共の〔学校の〕国語と漢文¹⁰⁾の先生は算術も教えておいでです。わたくしは朝の第一時限に全校の、来たい者は誰でも参加できる聖書教室をもっております。今朝は、よくあることなのでございますが、成年者が**10人**出席いたしまして、そのうちのお一方はわたくし共の生徒のお祖父様でした。〔この方は〕受洗はしておられませぬものの、わたくしにはクリスチャンのように思えます。これはわたくしの仕事のうちでももっとも楽しい特記すべきものでございます。午前中の他〔の時間〕は日本人の先生にお任せし、午後、英語、算術、地理、そして唱歌を教えております¹¹⁾。

通学生は全員、月に**75セント**支払っております。それから、寄宿生**22名**のうち、**10名**が月**2ドル**の全額払い¹²⁾、**3名**は授業のために何らかの手伝いをいたします。また、**4名**は課外の時間をギューリック家¹³⁾で働き、食事のためと夕刻と夜間は帰宿することにして、自弁しております。あとの少女たちはホームの家事万端を引き受け、食事の用意などいたします。それは、多忙なものではありますが、楽しい世帯と存じます。

少女たちのうちで受洗者は**5名**にすぎません。けれどもわたくしは、他の数名もクリスチャンたることを固く確信しております。

わたくしは学校業務を楽しんでおります。けれども時折、どなたか学校を出たての方が勉強を受け持って下さったらどんなにか嬉しいでしょうと考えます。

只今ヴァッサー¹⁴⁾におります友人が来たがっておりますので、この方に働く用意ができた暁には、まさにわたくし共の待ち望んでいる人となることでしょうと期待をしております。バロウズ女史¹⁵⁾の御来神は本当に神慮によることでございました。わたくしは膝の故障のせいで、この春から初夏にかけましてはいつもの仕事を続けるのに非常な負担を感じ、十分な仕事もできずに、盛夏となって有馬の山に参ることになりました。それからまた、ダッドレー女史は肺の充血でお倒れでした¹⁶⁾ので、バロウズ女史に、夏の間居残っておいまして少女たちの世話を、一手に引き受けていただくことになりました。ダッドレー女史はまだ全快とはゆかず、ずっと京都の比叡山に残っておいででございます。わたくし共、早く女史が全快なさって仕事に戻られますようにと願っておりますのですけれども。わたくし共は独身女性という強味を充分に持っておりますし、日本のために何かを為さねばなりません。わたくし共にはどのような仕事の機会があるかとお訊ねでいらっしゃいましたが、日本人は学識を大層尊びますもので、わたくし共外国人教師は、伝道団のほかの婦人方よりもはるかに、最大級の尊敬の念をもって見られております。男子にも女子にも共に、わたくし共は、他の宣教師方と同じくらい、充分大きな感化力を持っているような気がいたします。そして、殊に、女子に手を差し伸べますには女子が必要でございましょう。当地神戸におきまして、わたくし共は、伝道区の宣教師方から、この上ない御好意ととても御親切なお心遣いをいただいております。わたくしは、米国に在って気楽にしておりました間は、上述の如き確信を不可欠のものとは思ひもいたしませんでしたが、宣教師たちも人間にすぎないことがわかってまいりました。

わたくし共の上級の少女の一人は、クリスチャンで、わたくし共のもとに参りました時もう結婚しておりましたが、昨冬、異教徒の夫の傍でこの夫をキリストに向かわせるべく努めようと、わたくし共〔の所〕を去ってゆきました。彼女は全くキリスト教的影響から離れておりますが、しかし、どこで慰めと力とを見い出すべきかをわきまえております。やはりクリスチャンのもう一人は、姉妹が亡くなりましたため家に呼び戻され、大阪に住んでおりますが、いかな

る宗教的集まりにも出席することを許されずにあります。もう一人、姫路から連れて参りました少女¹⁷⁾は、この夏休み、大阪の官立英語学校の教師をしております非クリスチ안의青年と婚約して帰って参りました。彼女の信仰心を目醒めさせ、どうあってもこの婚約を解消するよう努めねばならぬという決意をさせますには、ほんの一言の助言が必要でございました。彼女は両親のつよい反対にあいました。それにはじめのうちは青年も憤慨しておりました。けれどもついに彼は、少女の出しました、もし彼がクリスチアンになったなら結婚もよしという別策を受け入れ、秘かに聖書を研究することに同意いたしました。彼は助けをもとめてゴードン博士¹⁸⁾のもとに赴き、こうしてわたくし共の祈りは早々と聞きいれられたのでございます。彼は謙遜なクリスチアンとなりました。二、三日前に書かれました英文の手紙に、キリスト教を研究してみるようわたくしが勧めましたことに感謝の意を表しつつ、彼はこう書いております。「小生、キリスト教については何も存じませんでしたが、あの女^{ひと}がクリスチアンであるとわかれればわかるほど、ますます愛しくなりました。」婚約した人々が、この人たちほど充分におたがいを理解しようということは、並のことではございません。もっとも彼は、外国人は自分で自分の妻を選ぶということを学んだので自分もそうしたいというくらい、物わかりのよい人でした。この人たちは来月6日にわたくし共の所で結婚いたしますが、わたくし共は、彼らの家庭が小暗い土地で光の中心となりますようお願いしております。彼女の信仰に関する最近の試練は、彼女一人に対する祝福にとどまらなかったのでございます。そして、わたくし共は、わたくし共の〔もとに在る〕クリスチ안의若者たち全てを異教徒の男女との結婚から守りたいものと願っております。

この青年は、自分が教鞭をとっております学校にジェインズ大尉¹⁹⁾の場を確保しようと、根気よく努力しております。そしておそらく、さしあたっては、ジェインズ大尉はそこへ赴かれましょう。大阪では本当に、他のどこにも劣らず、あの方の助けが必要なのでございます。ジェインズ大尉とその御家族は昨夕神戸に到着なさいました。同じ船でポーター女史²⁰⁾がおいでになり、只今、わたくし共の客人とおなりです。女史は、わたくし共が心配しておりましたよ

りはずっとよろしいように見えますが、明らかに休養を必要としていらっしゃいます。女史は間もなく中国に帰れようと大層望みをもっておいでです。

この便にて、わたくし共の家の写真²¹⁾をお送り申し上げます。多分、正面玄関のすぐそばのテラスに立っておいでのアッキンソン氏²²⁾をお見わけにならしましょう。氏の右手の方が応接室でそのま向こうがわたくしの部屋になっております。わたくしの右側にはベリー夫人²³⁾がおすわりでいらっしゃいます。家の向こうの端のヴェランダにはラーネド御夫妻²⁴⁾と御夫妻の先生であるマイダさん²⁵⁾がおいでです。そのま下で教室の前にいらっしゃるのはギュリック女史²⁶⁾、家のほぼ中央の辺りの前列にすわっておいでなのはアッキンソン夫人²⁷⁾で、その椅子の後にダッドレー女史²⁸⁾がお立ちです。その後が女史の部屋になっております。少女たちの食堂がダッドレー女史の部屋に隣りあっております。それから、居室の方は全部で11室²⁹⁾、各室2、3人を収容いたしますのが、全て階上の正面中央部とその向かい側とにございます。ほかに二つ三つおもしろい写真がございます。一枚は、何かがあります際の労働階級の服装を写しております。人力車の中の紳士は、明らかに役人でございます。一枚は京の寺、一枚は京都の大仏³⁰⁾の梵鐘で、鐘の傍らの男の方は冠り物をとって脇に置いております。下の方には風景が見えます。この建物は寺院のそれでございます。

わたくしは休憩の折りにとりとめのないお便りを書いてまいりましたが、これは、伝道団やあるいはまた伝道区の報告書を意図したものではございせん。スタークウェザー女史³¹⁾は、京都での仕事の見通しに、大変満足そうでいらっしゃいます。グールディ女史³²⁾は、昨年よりははるかに快調で、学園外での仕事をいくらかなさることが可能のように思われます。11月の1日頃、フィーラー女史³³⁾とスティヴンス女史³⁴⁾はグールディ女史と一緒に新しい家に入居のおつもりですが、あの方々は有能でいらっしゃいますから、活動の便宜も増すというものでございましょう。仕事にとりかかります前の待機の年月は、当地日本におきましては、妙に辛いものでございます。〔と申しますのも〕ここでは変化がとても急激だものでございますから。わたくし共は、最初の5年以内に内部の仕事に倦まない人々は全て、神からの保護と抑制との賜を永久に記念

するものとなるでありましようと考えております。

わたくし共の学校事業は、着々と進んで参ります官公立の学校と歩調をあわせねばならず、さもなければ信望をなくし感化力を失うこととございまいしょうから、特別に疲れさせられます。けれどもわたくし共の生徒たちは皆、わたくし共が痛感しておりますと同じく、わたくし共の偉大な目標が、この人たちをキリストに達せしめることであり、また、この人たちが他の人々の教師となれるよう助けることである——ということを感じております。

わたくし共の伝道区外³⁸¹での活動のことは、他の方々からお聞き及びでいらっしやいまいしょう。あちらでは女手が入用なのでございますけれども、これまでのところ一人で出かけてゆけるような日本婦人の助け手はほんの少ししかおりませんし、またわたくし共がそうしょつ中出かけるわけにもまいりません。わたくし共は、このミッション年度内に、明石に一つ教会をたてたい³⁸²と願っております。そしてわたくしは、長時間の人力車行に耐え得るようになってあちらの婦人方のお手伝いに行けます時を、切に待ち望んでおります。兵庫³⁷¹のダッドレー女史のクラスの婦人方は、女史の復帰を一日千秋の思いで待っております。わたくし共はこれら二つの教会が、かなり近いうちに、模範教会となるでありましようと思っております。

主にお仕えしつつ

敬具〔真に衷心より〕³⁸³

イライザ・タルカット

一本部着12月1日—

第321号

神戸、日本 1877年2月6日

クラーク博士様

12月2日附貴信、前の便にて1月28日に到着いたしました。わたくし共の学校の財政に関しまして、御質問にお答えしてみましょ。近々財政的自立³⁹⁾をお約束しておりました学校のために300ドルもの特別支出をお願いいたしましたは、びっくりなさいますのも当然と存じますから。

わたくし共、自分たち存じよりの事どもにつきましては、他の方々も直観的におわきまえ下さるにちがいないと思いがちでございます。けれどもまた、学園外の伝道団におかれましてはどなたも、わたくし共のやりようにつき、親しく責任をお感じになるようなこともございますまい⁴⁰⁾。伝道団の書記の方からいかなる説明もございませんでしたのは、この故と申せましょ。

実を申せば、昨年はわたくし共の家が新しく、わたくし共の小さな家族のために家具を新調いたしましたので、建築基金が入用でございました。なおまた、学年度の前半期は日本人の教員がおりませんでした。後半期には、月額7ドルだけ支払いました。今年は生徒の増加に伴い、わたくし共の入用なものがふえてまいりました。新しい道具類、それに建築の際に予想し得なかったものを補わねばなりませんし、換気装置が不適となりましたことなど。それから、わたくし共は神道の婦人を解雇し、クリスチャンの男子を雇傭いたさねばならぬことになりました。この婦人はその約束とは裏腹にキリスト教に対する偏見を公言してばかりおりましたので。新任の方には月額10ドル（ほかに私設基金の方から2ドル加えます）支払っております。助手をしております少女たちの一人には、食事つきで月に1ドル支払います。学年始めこのかた、わたくし共は、教員の俸給に65ドル、修繕費等に25.05ドル、薪代34.48ドル、燈油代、月当たり2.05ドル、使用人給料、月当たり5ドルを出費いたしました。それに数々の雑貨類と食料品の請求書がございます。

わたくしは、学費を月3ドルから2. [...] ⁴¹⁾ 5ドルに引き下げようという、昨夏の伝道団の表決を、少々早計であったと考えております。当時わたくしはそれを黙認いたしましたけれども。なおその上にわたくし共は学校に在って、表決は2ドルに引き下げられるものと考えました。そして、そのように広告してしまいましたから、今年それを変えるのは最良ではないと考えました⁴²⁾。只今

わたくし共は28⁽⁴¹⁾人の生徒を擁しております。うち、22人が学費を納入しておりますが、そのうち14人は親がかり、2人はジョン・ギューリック氏⁽⁴²⁾のもとに在ります中国娘、他の6人は伝道団内の個々の方々からの援助を受けております。それに、残りの6人は、学校外で働くとか教えるとかして、一部を自弁いたします。わたくし共は秋の始業以来、舎費および授業料として212ドルを徴し、当座の出費のために別に130ドルを金庫から引き出しました。日が長くなり暖かくなってまいりますから、出費はいく分か軽減されることでございましょう。わたくし共は、経済的に運営するよう努めてはおりますものの、まだ財政的自立と言われるわけにはまいりません。わたくし共の家は満員でございます。それで、地方からの寄宿生3名と神戸からの6名とをお断わりしてしまいました。この家に36名から40名を越える生徒〔を容れること〕は望ましくないと存じます。わたくしの思いますには、もしももっと多くなりますと、わたくし共の望んでおりますような直接の感化力をもって各人に接するということは不可能でございましょう。もっとも、わたくしの考えが変わることもございましょうが。

しかしながら、寢室の不足はさておき、わたくし共の教室は小さく、また、教員たちのために少なくとももう一部屋が必要でございます。それ故わたくし共は、現在の部屋を教員室として用い、またさらに若干の少女たちを受け入れるために、校舎を建てねばならぬと考えております⁽⁴³⁾。この問題は、少しばかり論じはいたしました、まだ伝道団の方に申し出てはおりません⁽⁴⁴⁾。基金をそのような目的に使うということにつきましては、おそらく伝道団の中に意見の不一致がありましょう。わたくしはどうもこう考えてしまいます。つまり、地方に伝道者を送るために当地の教会には非常に多額の金子が入用ではあります、わたくし共はわたくし共自身の家を建てなければならないでしょう——と。

当地でのわたくし共の活動の実りにつきまして、書き記すことは容易ではございません。わたくし共はそれらを、少女たちの知的成育、聖書研究に対する関心の増大や救い主を受けいれようという心の明らかな芽生えのうちにみております。わたくし共の生徒の一人は、昨年12月に大阪の英語学校の教師のもとに嫁ぎました⁽⁴⁵⁾。〔この方は、〕この国にあっては珍しいことですが、少女の感

化によってクリスチャンとなった人で、彼女は、彼がまだクリスチャンではなかった頃、彼との結婚を拒み、彼女の信条に対する誠実さを貫いて大きな勝利を得たということのようでございます。彼は、彼女のために、秘かにキリスト教を調べ始めました。しかし間もなく隠しだてをしなくなり、クリスチャンを名のりました。彼は、妻の信仰の方が自分のよりも強いと申しますが、大層熱心な働き手であります。彼と新たに大阪の第二教会牧師に任ぜられました澤山⁴⁸⁾とは、とても親密な交友関係をもっておりまして、彼の示唆と助力とにより、彼の妻の姉妹（これもわたくし共の生徒でございます）が澤山さんの妻となるよう、あらかじめ準備が整えられました⁴⁹⁾。わたくし共は少女の方を責任をもってお引き受けいたしました。それと申しますもこの人は、その生涯を福音を説くことに捧げようという一青年の花嫁となる方なのですから。パロウズ女史の日本語は順調に進んでおりますから、貴重な働き手となられることでしょう。ダッドレー女史は、数か月の間わたくし共から去っておいででしたけれども、〔今は〕神戸にお戻りで、近いうちに思いきってこちらでの御自分の仕事に戻ってみようとおつもりです。あの方は、外での活動を望んでいらっしゃいますが⁵⁰⁾、パロウズ女史は教師ではありません。わたくし共はどなたか、学校を預かって下される方をほしいと存じます。どなたか、本国でこのような学校の校長の職に就いたことがおありの方を。わたくしは、学校業務を回避したがつているわけではございません。わたくしにできますことは何なりとお手伝いいたしましょう。すでに現場に在る者たちと共に働くようにと人材を派遣することのむずかしさにつきまして、おっしゃいますことは全てごもっともと存じます。とは申せやはりわたくし共は、もっと多数の独身婦人が一日も早く神戸に遣わされ、この方々の中から、一層有力な働き手となるでありましょう少女たちの鍛錬のために、専ら、婦人たちの間で働く愉しみの方を喜んで差し控えるような方が出て下いますようにと願っております。スタークウェザー女史は、他の方々からお知らせがありそうですが、好調にやっいていらっしゃいます。皆様、声を大にしてそちらに御援助をお求めでした。そして女史は、その方々がお着きになればいつであろうと、活動のお手伝いをするちからがおり

のことでしょう。もしも当地においで下さいましたならば、現状では誰も、神戸あるいは大阪から京都に移るわけにはゆくまいというわたくし共一同の意見に、きっと御同意下さることと存じます。

敬具〔真に衷心より〕

イライザ・タルカット

—本部着 3 月 8 日—

第322号

比叡山 1877年 8 月 7 日

クラーク博士様

わたくし共の学校の収容設備拡充のための基金に関する要望書が、伝道団全体の署名を得てお手元に参りました頃、わたくしは、その件につき特にお便りする必要ありとは考えておりませんでした。わたくし共の学校のことは折にふれて報告申し上げておりましたし、それが時と共に大きくなり、現在の設備では間に合わなくなりましたことは御承知のこととございましたから、わたくし共はわたくし共の拡充計画に対する貴方の即座の御支援を期待しておりました。殊に、わたくし共は、日本人側からおよそ 800 ドルを寄せられておりました⁵¹⁾ので。

けれども、何かの理由で、わたくし共の出願にはお返事が戴けません。そこでわたくしは、遅ればせながらこれを認^{した}めております。このわたくしの手紙がお手元に届きます頃にはすでに特別充当金の御用意ありということになりますよう、なお祈念いたしまして。

わたくし共は、学校にもっと生徒をいれることを望んでいるだけではございません。とは申せ、わたくし共、学級数をふやさずに、あるいは生徒数に応じ

て用務をふやすことなく、もう15人をとることができるとは考えておりませんが。しかしながら、以前は経済的に建てたいと望みましたために、わたくし共は自分たちのために十分な私室をとりませんでした。わたくし共の一人はいつも快く自室を来客のためにあけ渡しておりますが、わたくし共は時に、このような繰り合わせにかなりの不便を感じております。それに、わたくし共は、神戸に少なくとももう二人の婦人をお願いいたしました。そこで、わたくし共と一緒にありますこの方々のために、なるべく速やかに、快適な住居を整えたいと思っております。

わたくし共の新館の計画⁵³⁾では、一階に、講義室と大講堂、階上に、教師たちの部屋を二つと15人の生徒たちのための寄宿施設とを置いております。これにより現在の学舎を、客間と少女たちのための大食堂とにすることができましよう。

わたくし共の便宜と能率増進のためにこの増築がすぐれて必要なことは、伝道団満場一致の見解と存じております。もっとも、[.....]⁵⁴⁾二人の兄弟方は、もはや宣教師の俸給以外には何ものについても外国のお金を求めることを潔しとはなさいませんでした⁵⁴⁾。しかしながら、わたくし共大多數の者が痛切に感じておりますことは、成程わたくし共は、当地の諸教会の側におきまして、全ての善き働きに彼らの協賛を得ながら、本国の宣教師方のお骨折りを助成いたすべきではございますが、日本は、いたる所に不信心の種が蒔かれておりますので、その子女のためにキリスト教教育の基礎が据えられるのを便々と待つわけにはまいらないということでございます。

わたくし共の学校業務は、もしもこれが主のための御用でございませでしたら、大方は、どこの学校業務とも同様に、単調な骨折り仕事というところでございます。しかも、驚くべき成果をすぐさま目することを期待するわけにもまいりません。学校の最初の生徒のうちの数人と英語の最上級の生徒たちは、わたくし共のもとに参ります前には勉強の点ではさほど知的な訓練を受けておりませんでしたので、その主な精力を自国語を学ぶために費やさねばならず、英語の向上進歩は速やかではございません。ほかの、もっとあとから参

りました者たちは、もっと速やかに進んでおり、わたくし共はおおむねその進展ぶりに満足しております。けれども、わたくし共、日本における知的教育の水準を高める助力を心がけておりますものの、わたくし共の最大の望みは、これら愛しい少女たちが、まじめで聡明で克己心のあるクリスチャンとなることでございます。今年は6人の生徒たちがイエスに対する信仰告白をいたしました。生徒たちは皆共に親密に交わっておりますから、クリスチャンたちの日々のふるまいはかなりまじまじと注目されているのでございますけれども、彼女たちは概してこの審査にかなり立派に耐えていることがわかります。学校の初めからの生徒で神戸在住の一少女は、何か月もの間両親から受洗を差し止められておりましたのに、ついにはその父母と祖母とをイエスに引き寄せ、昨年1月、皆一緒に教会に入会いたしました。あるかわいい少女は、郷里の友人たちの敵対を受けてひどい難儀にあい、自室にひきこもってしまいました。わたくしが見にゆきますと、彼女は泣いていて、起き上がることも慰められることも拒絶いたしました。わたくし共は朝拝にヘブル書を読んでおりましたが、まだ12章には至っておりませんでした。わたくしは本を開き、彼女にその第6節を指し示しました。それから、11節と12節とを。少女はそれらを注意深く読み、やがて目を上げて言いました。「では、わたしはここに寝ているわけにはまりませんね、」⁵⁵「そうですとも、あなたがクリスチャンならばね」とわたくしは申しました。そしてすぐその場を離れました。いくら経たないうちに、わたくしは彼女がいつもの仕事に携わっているのを見ました。彼女は、わたくし共のもとに参りました頃は、家中で最もわがままで片意地の少女でした。このようにわたくし共は、あちらこちらで恩寵の勝利に接し、また、主がわたくし共にお与え下さるお役目を享受しております。

わたくしはこの夏を、あるいは6週間程度になるかとは存じますが、比叡山でラーネド家の方々と共に過ごしております。ディヴィス家⁵⁶のテントが近くにあり、わたくし共は日々、共に歩き、語り、読書いたします。二つのあきテントがスタークウェザー女史の〔テントの〕両隣にあって入居者を待っておりますが、こちらはこの夏はおいでにならないことでございましょう。わたくし

共は、婦人方がこの夏の暑気のさ中に見えることにならなかったのを、喜んでおります。但し延引は、もし〔……〕女史⁵⁶⁾の経験から判断して差し支えなければ、危険ではございますけれども。ダッドレー女史とバロウズ女史とは有馬で夏を過ごしていらっしゃいます。ダッドレー女史は、去年は厳しい試練にあわれましたが、現在はずっとよくおなりで、この秋には仕事を再開することをお望みです。もっともあの方は、もう一度学校に入ろうとはなさいませう。バロウズ女史は最終的に日本語を習得しておいでのところ、仕事に就くことを楽しんでいらっしゃいます。わたくし共の力は弱まっておりましたので、わたくしは町に働きに行くことが全くできずにおりました。わたくしは婦人たちの間での活動を本当に楽しんでおりますけれども、もし、ここの少女たちの間から婦人たちのための働き人を育て上げるにつき、わたくしに手伝いができますのなら、わたくしは満足でございます。

神戸の婦人たちがいく人か、神戸だけでなくその近辺の町々でも活動を始めております。それ故この夏は以前よりも留守にしやすいでございます。夏休みの間伝道に出かけてゆきました神学校の学生たちから、時折楽しい報告が参ります。四国に在る一人から今朝受け取りました便りは、心からなる協力や興味津津の聴衆のことを報じております⁵⁷⁾。この青年は神戸教会の会員で、また、ベリー博士御帰米の決定により一つの提案が出されるまで、博士の医学上の弟子でありました。わたくし共はかねて、彼に、専ら伝道に身を捧げるようにと勧めておりました。彼はこの春神学校に入り、こうしてわたくし共の最良の働き手の一人が神戸から奪われたのでした。

この長々しい便りをお詫び申さねばなりません。ごく最近、とても大勢の方がそちらに赴かれましたのに。そして、この方々は、手紙などよりも余程充実した情報を差し上げることでございましょう。それにまたわたくしは、大判の用箋が尽きましたので、この小さな用紙でしめくりました。どれほどわたくし共、ボストンとその近郊における神のすばらしいみ業に歓喜いたしましたことか。本当に、この聖なる福音を普く全地に伝えるために、これらの男女そしてその手段が〔……〕⁵⁸⁾されることはございますまい。

敬具〔真に衷心より〕

イライザ・タルカット

—本部着 9月24日—

第323号

神戸 1878年 3月29日

ワード様⁵⁹⁾

オルガンに関する情報、および、わたくし共の学校に一台の楽器を——との希望に対する御返事に御礼申し上げます。

スミスのオルガンは最も廉価でございますので、わたくしの友人のコドヴァ氏⁶⁰⁾が、そこから51ドルで売りに出されております楽器を発注するよう望んでおります。当伝道団宛に送られて参りましたオルガンは、いく台か、梱包がしっかりしておりませんでしたために、ひどく傷んでおりました。どうぞ、スミス氏にこのことをお知らせ下さいまして、予め⁶¹⁾特別の配慮がなされますよう御依頼下さいませ。

費用の点でブリキの内張り無しでお送りいただきとう存じます。

楽器が本当に満足のゆくものでありますよう切望しております。

わたくし共一同元気でございます。クラークソン女史⁶²⁾には、骨休めをして新しい友人たちや生活の様式に慣れていただいております⁶³⁾が、今朝は庭いじりをしておいでです。ムラサキシミレ、水仙、つばき、〔……〕⁶⁴⁾が満開でございます。

敬具〔真に衷心より〕

イライザ・タルカット

—本部着 5月 2日

返信 5月 4日—

神戸 1880年7月5日

クラーク博士様

そちらでは当伝道団のいろいろな方々から頻繁に情報を得ておいでのことですから、いつも、わたくしの手紙は単に無くもがなのものであらうという気がいたします。すでにお聞き及びのことと存じますが、クラークソン女史が神戸の学校の全面的責任を負われることになりました。そしてわたくしは、この秋岡山に参ります⁶⁷⁾。

わたくしは暫時、ここを退いた時に十中八九赴くべき所として、京都に注目しておりました。けれども、出発の用意はすでに整っております。ウィルソン女史⁶⁸⁾が健康を害しておいでのことやパームリー女史⁶⁹⁾が京都入りを志願なされたことが、岡山に参ることにつきましたのわたくしの逡巡に決着をつけたようでございます。このことは、この学校事業をあとにしてゆくということにとどまりません。それは、わたくしの、日本における最初の自立的住家を去ることであり、そうして、数年間共に働いているうちに、わたくしが頼りにすることができるようになってきた人々を去ることでございます。それからまた、たくさんのクリスチャンたち——わたくしがこれまでずっと、そのあらゆるキリスト教的体験をすっかり見守ってまいりました、この人々を去ることでございます。

けれども、わたくしは喜んで出立いたします。岡山には、働き手たちの気持ちの良い会がございます。そしてわたくしは、過ぐる4月に少しばかり、彼の地をそれとなく見に参りました時⁷⁰⁾に予感したことでございますが、この方々

はきっと歓迎して下さることでしょう。わたくしは、すぐにも、この新しい環境に順応してしまいたくなり、新しい活動を以前のものと同じように充分に享受しようと願うようになります。あちらでのすばらしい幕開け⁷¹⁾のことは、すべて御存知のとおりでございます。

婦人たちは、数の上からも個々の力におきまして、現在のところ男子を上まわっております。

ペティー夫人⁷²⁾のことはどなたかが申し上げたでしょうか。あの方は御夫君が日本に来られたからついて来られただけで、御自分でもおっしゃいましたように「宣教師として来たのではない」ということでした。このことは、もちろん御承知でいらっしゃるね。神戸においでの間夫人は、活動にも人々にもさして関心をお持ちになることもありませんでした。ところが今や、あの方は活動において飽くことを知らず、さらに辛抱強く外国の家や物を不慣れな見学者たちに説明したりもして、人の忍耐にとって最も辛いようなことにも倦むことがありません。そうしてあの方のクリチャンとしての全人生が新しい推進力を受けたのでした。

このようなことをお話しいたしますのは、まるで家族内の秘密をもらしているかのような気がいたします。けれども、もしもまだ夫人御自身のお便りがこのことをお伝えしていないのでしたら、これがお耳に達すればお喜び下さることでしょうと存じております。このことをこの手紙によって知ったと御他言下さいますな。事実は早晩明らかになることでございましょう。

わたくし共、本国の皆様と同じく、ウィルソン女史が健康を損ねておいでのことを大変残念に思っております。あの方は、活動に適したなかなかすばらしい資質をお持ちでした。けれども、あの方が日本にとどまるべきでないことは、あの方に会った人の誰もが認めるところでございました。

わたくし共はこの伝道団に在りまして、仕事に耐えるのの大切なことを学ばねばなりません。そしてこの教訓はわたくし共にとりまして無駄なことではないと存じます。わたくし共は、この秋ケログ女史⁷³⁾が来日なさるということのをうかがって喜んでおります。あちこちにあの方を待ち受けている所がござい

ます。しかしながら、わたくしの見るところでは、ガードナー女史⁷⁴⁾が、自分こそあの方を最も必要としていると、わたくし共に信じさせようとしていらっしゃいます。先にクラークソン女史が、キャリー・ホワイト女史⁷⁵⁾を派遣されますよう、お便り申し上げました⁷⁶⁾。わたくし共は皆、あの方が秋においでになれることを願っております⁷⁷⁾。それは、以前からお互いに知りあい、また共感のあったことにより、非常に望ましいことのように見受けられるのでございます。それに、ホワイト女史についてわたくし共の耳に入りますことのいずれをとりましても、あの方は、まさしく、こちらの少女たちの指導に手を貸して下さるべき無二の人物でいらっしゃいます。

わたくし共の少女たちの一人は、年内か、あるいは来年早々に、すでに按手礼を受けられた牧師方のうちのお一方の妻として出立いたします。またたくさん少女たちが、まじめなクリスチャンたるの志を証して見せております。

グリーン氏⁷⁸⁾の先生の松山⁷⁹⁾は、これまでのところ、神戸教会の牧師として、わたくし共の期待のことごとく正しかったことを立証しております。もっとも、まだ判断を下す時期ではございませんが。聖書についての彼の知識やその見るからの謙譲さや智恵と力とに關しての聖霊への信頼は、必ずや彼を大いに実力ある者とするものでしょう。

ほかの方々もお書きになったことですが、わたくし、日本の婦人は福音活動を満足に行なうことができないというそちらの印象を、敢えて正させていただこうと存じます。この印象は他の異教国の女性たちと比べましても格別に事実ではないと申し上げねばなりません。婦人たちは同性に対してのみならず、若干の者たちは、男性に対しても、満足にふるまい得ております。いまだ時機が至りませず、あるいはまた、系統だった教育のために共に好都合の時を〔……〕⁸⁰⁾するだけの力がなかったものでございますが、わたくし共が特に望んでおりますような自主的活動の訓練を受け得る人々がかなりの数にのぼってまいっております。同時にまた、ゆき届いた母親としての、また主婦としての、模範を示しつつ、しかもなお他の人々にキリストを告知らせる時を作り出しております。一層多くの人々がございます。わたくし共の神戸日曜学校の先生方のうちお

二人は多忙なおかあさまで、キリスト教に達します以前は家を離れる時などまるで持ちませんでした。只今は、一人の方がその授業の準備をされますのをわたくしが手伝いに行き損ねたりいたしますと、この方は、夜、一日の仕事を終えたあと、お留守居の無理な二人の幼児を連れて出ておいでになります。

岡山ではクリスチ안의祈禱会に出席いたしましたが、その時はいつもの指導者である金森氏⁹¹⁾が御欠席で、一つの章を読み、短い開会の演説があったのち、前の週から発表されていた主題につきみなが自分の考えを自由に話すように勧められました。婦人たちは、一、二を除いて男子よりもずっと当意即妙、その問題に対してよりゆき届いた考えを発表しておりました。みなから司会者に指名された婦人は、一人の紳士に意見を求めました。そして彼が、自分には申し述べられることが何もないと告白いたしますと、婦人は彼に、来週までにこの問題を注意深く検討しておいて進んで手伝って下さるようにとたのみました。なるほどこの人は例外的な女性でございます。けれども、慎ましやかさと気転とにより強い感化を及ぼすことのできるような人はかなりたくさんございます。

神戸のわたくし共のところには、現在までのところ、婦人たちの中に無報酬の働き手があります。どなたも専従の御奉仕ではありませんが、聖書のクラスはいつも、為された活動の報告をする時間となります。最近の火曜日の午後、婦人のための聖書のクラスが三つ、教会で合同の集会をいたしました。28名から30名の婦人たちの出席があり、そのうち何人かは赤ちゃん連れ、それに多忙な主婦たちが大方でございました。わたくし共は使徒行伝を読んでおりますが、それは、この草創の時期にあります当地の教会に不思議なほど生き写しのような気がいたします。わたくし共は、最初の使徒たちにその活動のためあれほど偉大な力をお与えになった聖霊のあのバプテスマを、ひたすらに待ち望んでおります。

わたくしがこの用箋を選びましたのは、この便りの私信たるべきことを望みましたことによっております。本当でございます。どうぞそのようになさって下さいませ。

敬具〔真に衷心より〕

イライザ・タルカット

—本部着 8月2日—

註

- 1) 神戸に女子の寄宿学校が開かれたのち、初めて米国伝道会に達したタルカット女史の書簡である。タルカット、ダッドレー両女史による学校は、1875年10月12日に開校した。しかし開校の模様を伝える即時的な書簡は残されていない。タルカット女史の書簡が、1875年8月4日附（前稿の最後の便である）以来、翌1876年10月18日附（本稿第1信にあたる）まで途絶えていることについては、この間に、本文中からもうかがえるように、本部に着かなかったものがあつたらしいことを考慮に入れてみることでできよう。

開校に関する史料については、「神戸女学院百年史 総説」pp. 42-44に、またその当時の状況については、同上書 p. 42 以下に詳述されているが、開校直前の記録としては、A. R., 1875, p. 57『教育と出版』の項に、1875年5月に書かれたアッキンソンの報告(M. H., 1875., Sept., p. 266. 所収)の引用の掲載があり、「神戸に、女子のセミナリーもしくは『ホーム』を建設中である」と述べている。開校後のもっとも即時的な記録は1876年3月20日附のダッドレー女史の書簡で、それによれば、タルカット女史が校務に専任、ダッドレー女史は家政に当たり、家族の数は17名となっている。公式の記録は、1876年の年次報告に紹介されたアッキンソンの書簡である(A. R., 1876, p. 75)。ここには、神戸の学校が1875年10月12日にその新学年度を始め、寄宿生10名通学生24名を入れたが、寄宿生の5名は信仰告白をしていること——が記されている。

開校当時の様子をうかがうには、ほかに「七一雑報」明治9年8月の紙上に掲げられた開校広告、同じく明治10年4月13日及び20日附紙上の『女学校のはなし』を参照することができる。なおその後「神戸開港三十年史」もこの出来事をとり上げているが、「此に於て始めて英和女学校と稱し…」とある(坤 p. 510.)のには疑義がある。「日本組合基督教會史」も同様である。この校名の問題に関しても、「神戸女学院百年史 総説」pp. 46-48 および pp. 63-64 を参照されたい。

- 2) タルカット女史が神戸伝道区を去る前の書簡である。女史は、神戸の女学校の責任をクラークソン女史に譲り、「この秋」岡山に行くと言う。但し、女史が岡山に赴いた正式な日附は、公式の文書(A. R. および M. H.)には記載がなく、この年の「七一雑報」には散佚の部分が多いため、明確でない。宣教師名簿の上では、A. R. においては1880年(秋。この年、A. R. は10月5日—8日附で発行された。)から任地を岡山とされているが、M. H. の方は1881年になっても依然神戸のままである。1881年2月19日附ペティー書簡は、岡山に移ったタルカット女史が「大いに前途有望な新しい集会

を発足させた」と伝えている (M. H., 1881, June, p. 224.)。

- 3) 女学校開校後1年を経て、はじめて、タルカット女史からクラーク氏のもとに届いた書簡である。
- 4) 本書簡のファイルによれば、1875年7月4日附以来初の便りである。但し、この前便と本便との間には少なくとも1通の不着便があったと思われる。それは、本便の、写真を送ったが「お手元に届かなかったのではありませんまいか」というくだりや、ダッドレー書簡1876年3月20日附の、「学校のことにつきましてはタルカット女史が詳しくお書きになることを存じておりますから、ここでは、わたくし共がそれを大層享有しておりますとだけ申し上げておきましょう」という一節によってもうかがわれるところである。
- 5) のちに「南舎」と称される建物である。「七一雑報」明治10年4月13日附紙上にはその図、“*The History of Kobe College*” p. 7 にはその写真(「1876年1月13日撮影」とある)が掲載されている。また、「神戸女学院百年史 総説」pp. 41-42 参照。
- 6) Mrs. Scudder とある。
- 7) この建築は、デイヴィスの建築家らしい創意工夫やタルカット女史らの日本女性の生活様式に対する心配りによって成り立っていた(*The History of Kobe College*, pp. 5-6.)。しかし後年クラークソン女史は、この家の寒さは特別で、耐え難いものであると洩らすであろう(クラークソン書簡1878年2月14日附)。
- 8) 次便(1877年2月6日附)にも言及あり、更に1877年8月7日附の書簡では建築計画が述べられる。また、ダッドレー女史はその1877年1月1日附の書簡で、学校は栄えており、来期は26名の寄宿生を擁することになるであろうと言い、「タルカット女史もわたくしも、遠からず、現在の建物に教室を増設しなければならぬ時がやって来ることと思っております。……」と述べている。
- 9) 学生数については、それぞれの人が思い思いの時期に記しているせいか、およそ判然としない。A. R. によれば、1874年には25名(p. 60.)、1875年、1876年は34名(p. 59, p. 75.)、1877年は28名(p. 66.)、1879年は43名(p. 77.)、1881年は56名(p. 75.)となる。このうち寄宿生が何名になるかは1875、76年が34名中10名と記されているのを除けば更に不明である。1877年の数はタルカット女史の同年2月6日附書簡から推すと寄宿生のみのようにも思われる。また、「七一雑報」明治10年(1877)4月13日附は「目今は生徒四十人餘に至りし故……^{はなは}学校の傍に新しき^{ひろく}廣き家を建築とせり……」と報じている。
- 10) 「七一雑報」明治9年8月18日、同25日附の『廣告』に、「國史漢籍を教^{にほんし}るために學務^{しな}に習練たる日本教員を得たり」とある。
- 11) 同上、中段参照。
- 12) 同上、後段参照。ちなみに、当時の換算レートは1ドル1円であった。
- 13) 米国伝道会宣教師 Orramel H. Gulick (前出(一)註55) の家庭である。
- 14) Vassar.
- 15) Martha J. Barrows (1841-1925). ダッドレー女史の従妹にあたる。ダッドレー女史の勧めを受けて(パロウズ書簡1875年11月12日附) 米国伝道会の宣教師として1876年来日 (M. H., 1876, April, p. 141.)。1924年に帰米するまで神戸に在って伝道に従事

- した。略伝は「天上之友」にも収められている (pp. 180-182.)。また「神戸教会月報」にもしばしばその名が見い出される。
- 16) ダッドレー女史の1877年1月1日附書簡にも、前年8月以来せきと肺の痛みとに悩み、京都で静養中のことが書かれている。また同年2月14日附には、病気に関するアダムス医師の見解を附した報告が記されている。
- 17) のちに大阪第二公會の澤山牧師の義姉となるこの女性には田島ぜん、キリスト教の信仰を受けいれてその夫となる人は小泉 敦である。
- 18) M. LaFayette Gordon. 前出(一)註78。
- 19) L. L. Janes (1838-1909). 1871年熊本洋學校の教師として招聘され来日した。1876年熊本バンド結成。やがて本便にあるとおり「大阪英學校の教師に招聘せられ」(「日本組合基督教會史」pp. 33-37. 参照) することとなる。事の成りゆきや彼のの人となりに関しては、M. H., 1876, dec., pp 395-397 のデイヴィスの報告、A. R., 1877, p. 63 の紹介記事のほか、デフォレスト書簡1877年1月29日附、3月3日附、4月9日附、12月19日附にも言及(ジェインズの大坂滞在のため伝道団にとりなしている)がある。また、M. H., 1878, Feb. の、元熊本洋學校学生の手になるという“Letter from a Japanese Student” (pp. 33-37.) も興味深い。
- 20) Mary E. Portor. 米国伝道会派遣の婦人宣教師。1868年より北京で活動。
- 21) この写真、また同封された他の数葉の写真、共にこの書簡ファイルの中には含まれていない。
- 22) John L. Atkinson. 前出(一)註25。
- 23) Maria E. Berry (1846-1932). John C. Berry (前出(一)註53) 夫人。
- 24) Dwight W. Learned (1848-1943). 米国伝道会派遣宣教師。来日1875年。夫人は Florence H. Learned.
- 25) Maida とある。前田泰一のことであろう。前田泰一は三田の人で、宇治野英語學校の発起人の一人であり、鈴木 清らと共に攝津第一基督公會の最初の受洗者となり、終始伝道活動に協力した。
- 26) Julia Gulick. 前出(一)註50。
- 27) Carry E. Atkinson (1848-1906). John L. Atkinson (前出(一)註25) 夫人。「天上之友」p. 154. 参照。
- 28) Julia E. Dudley. 前出(一)註9。
- 29) C. B. DeForest 著 “The History of Kobe College” には、“.....upstairs, the large front rooms were American teachers' bedrooms: the thirteen other rooms of varying shapes and size were in Japanese style, matted for students.” とあり (p. 6.), 「神戸女学院八十年史」p. 207, および「神戸女学院百年史 総説」p. 42, 共に生徒の部屋を13としている。
- 30) 不詳。
- 31) Alice J. Starkweather. 米国伝道会派遣の婦人宣教師。1876年来日。同志社女學校設立のため尽力中であった(「七一雑報」明治11年8月23日, 同30日, 9月6日附『同志社女學校廣告』の項。また、A. R., 1879, p. 80. 参照)。
- 32) Mary E. Gouldy. 前出(一)註107。

- 33) Justine E. Wheeler. 米国伝道会派遣婦人宣教師。来日1875年。1878年歿。「天上之友」p. 153. 参照。
- 34) Frances A. Stevens. 米国伝道会派遣婦人宣教師。来日1875年。のち, John T. Gulick の夫人となる。「天上之友」第二篇, pp. 191-192. 参照。
- 35) Out-station.
- 36) 明石における伝道活動については、すでにアッキンソンが1875年11月20日附でタルカット女史の活動を報告している (M. H., 1876, March, p. 81. 参照)。また「七一雑報」明治11年1月4日附, タッドレー女史の書簡中1878年2月14日附, および4月16日附において、神戸の教会員、宣教師たちの尽力が紹介されている。教会設立は1878年(明治11年)10月15日のことで、「七一雑報」同年10月18日附にこのことが報じられている。伝道団の公式文書としては、1878年10月21日附のアッキンソンの報告が, M. H., 1879, Jan., pp. 22-23 に掲載されており, A. R., 1879, p. 77 にも同様の記事がある。また、「日本組合基督教會史」pp. 53-54 も参照。
- 37) 教会設立は1876年(明治9年)8月6日のことであった。同年8月11日附「七一雑報」, M. H., 1876, Nov., pp. 377-378, および A. R., 1877, p. 66 にその模様が記されている。説教所の開設から教会の設立に至る過程については、1875年以来, M. H. また A. R. にも折にふれて関連記事の掲載が見られる。
- 38) Very truly yours とある。
- 39) self-supporting.
- 40) nobody.....[.....] to feel personally responsible..... となり, to feel の直前の一語が判じ難い。Giezentanner 女史は comes をもってこれに充てているが形態上未明である。
- 41) 2.25ドルかとも思われるが、はっきりしない。
- 42) 但し翌1878年(明治11年)の広告(「七一雑報」同年7月16日, 26日, 8月2日, 9日附)では、「從來の規則にては支給金員きんだかの不足を生じ償ふところなきを以て自今いせよりは入塾生徒の月謝月俸金二圓五拾錢と定め通學生の月謝は従前の通り金七拾五錢とす」と、舍費の値上げが告げられている。
- 43) 8の前の数字1字, 2と3とが重ねて書いてある。いずれかを訂正したものと思われるが、筆跡の濃さ等から判定することはむずかしい。本文を読み進んでゆくと、学費納入者22名, 一部を自弁する者6名, 計28名とするのが妥当と思われる。また、同じ時期のことを扱った年次報告が「現在学校内には28名の生徒 (twenty eight pupils と書かれている) がいる.....」(A. R., 1877, p. 67.) と述べていることから、この数字を3ではないとすることができであろう。但しこの場合は、この「学校内にいる」というのを「寄宿している」という意味に解さねばならないであろう。同年4月13日附「七一雑報」に「目今は生徒四十人餘に至りし故」とあるのはすでに見たとおりである(本稿の註9参照)。
- 44) John T. Gulick (1832-1923). 米国伝道会宣教師。Peter Gulick の三男で Orramel H. Gulick の弟, また, Julia Gulick の兄にあたる。1863年日本經由で中国に渡り, 1877年来日 (A. R. 1878, p. 85.)。「天上之友」第二篇, pp. 167-171. 参照。
- 45) 校舎の増築についての二度目の言及である。この件に関しては、前便および次便も参

照のこと。

- 46) 但し, M. H., 1877, June, p. 179 には, 「ベリー博士が, 神戸の女子セミナリーの建物の拡充を急務と紹介し……神戸でのこの 目的のための 募金を希望している」との記事が掲載された。
- 47) この話は前便でも述べられている。
- 48) 澤山保羅 (1852-1887)。日本において按手礼を受けた最初の人。この最初の按手礼については, 「七一雑報」明治10年1月25日附紙上に「浪華公會の新たに^{たろ}立たることと澤山保羅君が牧師に選ばれたる事」と題した記事がある。これは同年1月20日の出来事であった。同年1月29日附デフォレスト書簡にも言及が見られるが, M. H., 1877, April, は「受け取ったばかりの」レヴィット書簡をもってこのことを紹介している (pp. 113-114.)。A. R., 1877, p. 65, 「日本組合基督教會史」pp. 41-44 も参照。
- 49) この結婚に関しては「七一雑報」明治11年5月3日附紙上に, 「去月二十五日大阪土佐堀の梅花女學校におひて 浪華教會の 牧師澤山保羅氏と舊飾磨縣の士族田島氏の女にして神戸山本町二丁目の 英和女學校の生徒たりし増尾たか女と目出度婚姻の儀式を取おこなはれましたが, 會する人は二百人に過ぎ中々の盛會なりし由」と報ぜられている。
- 50) 次便1877年8月7日附では「もっともあの方はもう一度學校に入ろうとはなさいますまい」と述べられている。またバロウズ女史は同年11月6日の書簡においてダッドレー女史の回復について述べながら「しかし學校業務に戻るのは最善ではない」旨伝えている。さらにダッドレー女史自身はその病狀報告の中に, 「アダムス博士は……わたくしが學校に戻るのは不本意であるとおっしゃいました。わたくしはいつもそのことで疲れ果てておりましたから。そしてわたくしは, 學校業務の束縛に耐えることができませんでした」と記している。(1877年2月14日附書簡)。
- 51) 學校を開く際に日本人から寄せられた資金のことである。前出, (一)註101参照。
- 52) 「七一雑報」明治10年4月13日附において「新しき廣き家を建築とせり」と書かれ, 続く4月20日附紙上でもとり上げられている「第二校舎」の計画である。校舎完成に伴なう「開場」の催しについても同紙が明治11年3月15日附のページを割いて紹介している。また, 「神戸女學院百年史 総説」pp. 51-54. 参照。
- 53) 判読困難。5文字か6文字の1語である。殊に文字の上半部があいまいなため一層はつきりしないが, あえて判ずれば other かとも思われる。
- 54) 財政的自立 (または自給主義—self-support) の考え方である。特に, 当時大阪にあったレヴィットは徹底した自給主義の急尖峰であった (「天上の友」第二篇 pp. 154-155, 「日本組合基督教會史」p. 73. 参照) といわれ, 1878年1月7日附で大阪の女學校について述べた書簡にもこのことがうかがわれる。
- 55) Jerome Dean Davis (前出(一)註19) の一家である。夫人は Sophia D. Davis (1843-1886)。
- 56) 不明。Giezentanner 女史は Dyer と読んでいる。米国伝道会の記録にあらわれる Miss Dyer は北支の宣教師 Isaac Pierson の夫人となって1877年9月夫と共にサンフランシスコを出航した Sarah E. Pierson である。同じ船でウィルソン女史とパームリー女史が来日する (M. H., 1877, Nov., p. 381.) が, 本便に言われる「危険」とは何を指しているものかわからない。

- 57) 四国伝道のはじめは、1876年4月のアッキンソンの旅にさかのぼる（アッキンソン書簡同年4月29日附—M. H., 1876, Aug., pp. 250-255. 所収）。彼は翌年再び該地に赴く（アッキンソン書簡1877年5月7日附—M. H. 1877, Nov., pp. 377-379. 所収）が、この年の夏から「同志社學生の夏期傳道」（『日本組合基督教會史』p. 48.）が始まり、四国にも伝道者が派遣された。このことは「七一雜報」明治10年8月3日附にも記載されているが伝道に携わった者の名は明らかにされていない。なお同紙にはその後伝道先からの報告が掲載されており（同年8月24日附『國內傳道先よりの報知』の項）、中に、今治、松山に関する記事が見られる。また、タルカット女史が受けとった便りに関しては、M. H., 1877, Nov., p. 378 の註に言及がある。
- 57) この年1877年に休養ないしは静養のため帰国した宣教師たちは、ベリー夫妻、ドーン夫妻、ゴードン夫妻である（A. R., 1877, p. 62.）。
- 58) 判読困難。全体の形態上の印象からは withheld と読めないこともないが、字画からいうとこう読むためには少なくとも1字分程度の不足がある。
- 59) Langdon S. Ward. 前出(一)註99。
- 60) Mr. Kodova または Mr. Kodwa. 不詳。
- 61) 原文は用箋の最上端の一行で、コピーでは文字の下半分しか見えない。care be taken in beginning と推量するが、末尾の一語は厳密には不明である。
- 62) Virginia A. Clarkson (1851-1940). 米国伝道会派遣婦人宣教師。1877年11月来日（『七一雜報』明治10年12月14日附、また、A. R., 1878, p. 85.）。
- 63) このタルカット女史の書簡が書かれている頃、一方クラークソン女史自身は、「骨休めと慣れ」のための境涯をかく手紙を本部に書き送っていた（1878年2月21日附）。すなわち、女史には、「野はすでに刈り入れのために色づいている」のに誰もそれを取りいれようとしていないように思われ、待つことが非常に辛いと言う。「私は……アメリカでは何者かであり何かの役に立っていたように思いますが、ここでは、何者でもなく、ただのゼロでしかないような気がいたします」「タルカット女史は校内で大変忙しく働かれ、しかも外部においても非常に必要とされておられます。そして私は、教職は私の能力により適していると思い、またそれを非常に愛しております。……」

これより前、バロウズ女史は、着任早々のクラークソン女史が直ちに少女たちと接しはじめたのを見て、その迅速さにびっくりしたと記し、「この仕事のために、あの方が頑健な体をお持ちだとよろしいのですが、わたくし共は女史がお始めになるのを注意深く見守ってまいりましょう」と述べている（1877年11月6日附本部宛書簡）。

また、ダッドレー女史は、1878年2月14日附の書簡で、「クラークソン女史はまだ休養なさったようには見えません。早くそうなられるとよいのですけれども。わたくし共はあの方によく気をつけて差し上げるつもりであります。女史は、御自分がここにとどまりたいのかどうか、内心決しかねておいでのように思えます。わたくし共は、女史を、さもなければどなたか別の方を、必要としております。……そして、女史が少女たちや仕事にもっと慣れ親しみ、また強くなられますよう期待しております」「クラークソン女史は当地に在って不幸せとは、わたくしには思えません。けれどもあの方はそれを退屈だとお考えのようでございます。何と申しましてこの待機の時は、あのような活動的な方には辛いものなのでございましょう」と述べている。

なおこののちもクラークソン女史が、神戸での仕事に関する不満を連綿と書きつづって本部に送っているのに対し、タルカット女史の書簡には、感情的齟齬をうかがわせる言辞の1行も見られないことが印象深い。

- 64) 判読困難。9文字から11文字程度の言葉で、*daphne odora* かとも思われる。
- 65) 本便の署名は *F. A. Stevens* となっており、筆跡、口調共にタルカット女史の手になるものでないことが明らかである。受信側の分類の際の手ちがいにより誤まるとじ込まれたのではないかと思われる。内容は *Fannie E. Gardener* 日本派遣の報に接しての感謝の辞で、1878年7月6日附、発信地は有馬となっている。
- 66) タルカット女史の岡山転任に先立って神戸から送られた最後の書簡である。
- 67) 1880年の年次報告には、岡山の新伝道区における家庭婦人の間での伝道活動のための「差し迫った要請に応ずるべく、タルカット女史は、神戸の学校の責任をクラークソン女史に譲り、その居住地をこの新しい現場に移した」とある (*A. R.*, 1880, p. 82.)。婦人の間での活動は、ダッドレー女史に劣らず、もとよりタルカット女史の意に違わぬところであった。すでに見たとおり、1877年の書簡において、「学校とは関係のない婦人たちと共に聖書を読むという活動」を学校業務と両立させたいと願い (8月7日附書簡)、「学校の重要性を無視するつもりはございませんが……家庭の婦人たちの間での活動が有望なものですから……」と告白し (12月1日附)、また開校を目前に控えた1875年8月4日、別に学校業務の適任者を求める口吻で、「わたくし共は、婦人たちの間での一般的活動に携わる歓びを、これまでよりも差し控えなければなりません」と述べた女史は、その後さらに、「学校を出たての方が勉強を受け持って下さったら……」と書き (1876年10月18日附)、なお翌1877年にはさらにはっきりと、「学校を預かって下される方」「本国でこのような学校の校長の職に就いたことがおありの方」がほしい旨記していた (2月6日附書簡)。クラークソン女史が米国伝道会の照会に応じて日本赴任を決意したのは、その年の4月下旬のことである (クラークソン書簡1877年4月23日附、同4月30日附) が、1878年2月14日附の書簡においてダッドレー女史も、タルカット女史が学校の内外で多忙なことに触れ、「わたくしは、クラークソン女史か、でなければどなたか別の方が活動態勢に入られれば、あの方〔タルカット女史〕は喜んで校務から手をおひきになるでしょうと確信し、またそれがあまり先のことになりませんよう願っております。と申しますのもあの方は、外部での大きな活動に本当に適していращいますから」と述べている。そして、1879年の年次報告は、学校がクラークソン女史に委ねられ、他の婦人宣教師たちは、校務を補佐しつつも、その大半の時間を婦人のための活動に費して成果をあげていると報ずるにいたる (*A. R.*, 1879, p. 77.)。

もっとも、タルカット女史の岡山転出が決定するまでの校内の事情にはなお曲折があった。それは端的に言えば、学校の方針と伝道活動の在り方をめぐっての齟齬から招来したものであったが、タルカット女史自身はこのことについて何ら言及していない。事の経緯については、デフォレスト女史が豊富な史料を駆使して記述しており (*The History of Kobe College*, pp. 12-13.), また「神戸女学院百年史 総説」においても論じられているが、1880年8月30日附クラークソン書簡は、それが当事者の一人の手になる陳述だけに、含みがある。クラークソン女史は深く悩み、眠れぬ夜が

続いたと言うが、一方、1879年10月7日、ダッドレー女史はクラーク博士に宛てて書いた、「わたくし、あの方〔クラークソン女史〕の大変なお悩みは、力以上のことをしようというあの方の熱心であったと考えておりますが、あの方は、もっと快く援助を受けるようになっておいでのことと存じます」。ともあれ、1880年1月23日に横浜で静養中のバロウズ女史は、「実を申しますと、昨年は辛い年でございました。……非常な緊張がわたくし共一同の上には是非なくもたらされました」と述懐し、ダッドレー女史と二人、婦人のための活動に専念できる家を別に持つことを話しあっていたと記している。この計画は、タルカット女史の転出と相前後して実現した。ダッドレー、バロウズ両女史は神戸市内に「新たに一戸をかまえ、日本女性に対する伝道とキリスト教教育のために別の道を選んでいる」（「神戸女学院百年史 総説」p. 61. また、1880年8月30日附ダッドレー書簡も参照）。

- 68) Julia Wilson. 米国伝道会派遣の婦人宣教師として1877年10月来日（M. H., 1877, Sept., p. 293, A. R., 1878, p. 85.）。1879年より岡山で伝道活動に従事していたが、健康を害し、帰国を余儀なくされる（A. R., 1880, p. 80. 参照）。
- 69) Hariette Francis Parmelee (1852-1933), 米国伝道会派遣婦人宣教師。ウィルソン女史と共に来日。1924年に帰米引退するまで日本の伝道に尽くした。「天上之友」第二篇 pp. 210-212. 参照。
- 70) 「七一雑報」明治13年4月23日附紙上に、この月「九日金曜日」にタルカット女史が伝道のため岡山に赴いたとの記事がある。
- 71) 岡山伝道区の開設を指す。伝道区開設決定の報に接した伝道会は M. H., 1879, April のページを割き、“THE OPENING AT OKAYAMA” の項を設けてこのことを紹介している（pp. 142-143.）が、岡山専従の宣教師たちが神戸から赴任したのはその同じ4月の初めのことで、「七一雑報」明治12年4月4日附にはこう報ぜられている。「米國醫師ベレー氏は岡山の病院へ聘せられて去一日當地發足 同宣教師ケレー氏は同地有志者の取立たる學校教師に聘せられて同二日出帆……同宣教師のペテ氏もケレー氏と共に學校に行かれる筈にて……同女教師のウキルソン氏もベレー氏を助けて病院に働く筈にて……何れも五ヶ年在留の許可を受け兼て傳道をされる由」。

またこの年の M. H. の日本伝道の項はこの話題で賑わい、A. R., 1879 も1ページの余を費して記述している（pp. 75-76.）。

岡山伝道の素地は、アッキンソンの伝道旅行や同志社学生の出張伝道によって拓かれていたが、伝道区開設による成果は著しく、ついに1880年10月13日、教会の設立を見るに至る（「七一雑報」明治13年10月22日附, A. R., 1881, p. 73, また「日本組合基督教會史」pp. 61-62. 参照）。

- 72) 米国伝道会派遣宣教師 James H. Pettie (1851-1920) の夫人 Isabella W. Pettie. 1878年夫と共に来日。神戸在住1年にして岡山に赴任。
- 73) Louise Kellogg. 米国伝道会派遣婦人宣教師。来日1880年（A. R., 1880, p. 81.）。
- 74) Fannie E. Gardener (1849-1930). 米国伝道会派遣婦人宣教師。1878年来日, 1894年帰米。「天上之友」第二篇 p. 201. 参照。
- 75) Carrie E. White とある。（1880年6月1日附クラークソン女史の書簡も参照。）
- 76) クラークソン書簡1880年3月27日附, および6月1日附。

- 77) ダッドレー女史も1880年8月30日附の書簡において、「わたくしは、クラークソン女史のためにすぐにもホワイト女史がおいでになるよう、希望いたします。……。あの方〔クラークソン女史〕は仕事の重圧のもとにあり、あの方がホワイト女史に期待しておいでのようなものが必要なのでございます」と口添えしている。
- 78) Daniel Crosby Greene. 前出(一)註18。
- 79) 松山高吉 (1846-1935)。宇治野英語学校の発起人の一人であり、かつ攝津第一基督公會の設立に当たって受洗した信徒である。聖書の翻訳事業に携わるため転任したグリーンに従って上京していたが、明治12年8月29日附の「七一雜報」には、神戸教会一同の「供議」により、当時横浜にあった松山を牧師に迎えようとの交渉が始まっている旨の記事がある。松山はこれを受けて(「七一雜報」同年11月28日附)、翌年4月に来神(同上、明治13年4月23日附)、6月4日に按手札を受けて正式に神戸教会牧師の任に就いた(M. H., 1880, Sept., pp. 348-349.)。「日本組合基督教會史」pp. 60-61も参照。
- 80) この部分は用箋の上限で、ファイルにとじ込まれてしまったらしい1行(5乃至6語から成ると思われる)である。章句があることはわかるが、その形態を判断することはできない。
- 81) 金森通倫(1857-1945)。熊本洋學校出身で同志社を経て伝道に従事。岡山教会の設立と共に按手札を受けて主任牧師となる(本稿註71と関連)。岡山との出会いは明治11年夏の同志社休業中の伝道活動においてであった(「七一雜報」同年6月21日附)。そして1879年11月、ペティーは彼を岡山教会の“pastor elect”として本部に紹介している(同年11月13日附書簡。これは M. H., 1880, Feb., p. 62に転載されている)。

参 考 文 献

A. B. C. F. M. 宣教師文書

Manuscripts : Letters of Miss E. Talcott (1872-1880)

Letters of Miss J. E. Dudley (1872-1880)

Letters of Miss M. Barrows (1875-1880)

Letters of Miss V. A. Clarkson (1877-1881)

Letters of Mr. J. H. DeForest (1874-1880)

解説：川村大膳「アメリカン・ボード日本布教報告書の研究」—関西学院大学史学 第5号 (1959)、および関西学院大学共同研究紀要Ⅰ『明治研究』(昭和42年3月)

Annual Report of the A. B. C. F. M.

Missionary Herald

七一雜報(神戸雜報社・明治8年創刊)

兵庫縣八部郡地誌(明治16年、復刻・後藤書店、1977)

神戸開港三十年史・乾・坤(神戸市役所編、明治31年)

神戸教會月報（明治32年創刊，復刻・日本基督教団神戸教会，1975）
 日本組合基督教會教師會編「天上之友」（大正4年）
 神戸教會略史（神戸基督教會，大正13年）
 小崎弘道編「日本組合基督教會史」（日本組合基督教會本部，大正13年）
 大久保利武「日本におけるベリー翁」（東京保護会，昭和4年）
 日本組合基督教會教師會編「天上之友」第二篇（昭和8年）
 Charlotte B. DeForest, *The History of Kobe College*. (神戸女学院, 1950)
 神戸女学院八十年史（神戸女学院，昭和30年）
 小澤三郎「日本プロテスタント史研究」（東海大学出版会，1964）
 海老沢有道 共著「日本基督教史」（日本基督教団出版局，1970）
 大内 三郎
 小澤三郎「幕末明治耶蘇教研究」（日本基督教団出版局，1973）
 溝口靖夫編著「松山高吉」（松山高吉記念刊行会，昭和44年）
 日本基督教協議会文書事業部「キリスト教大事典」（教文館，昭和50年）
 キリスト教大事典編集委員会
 神戸女学院百年史 総説（神戸女学院，昭和51年）

正 誤 表

タルカッْتُ書簡一訳および註（一）

神戸女学院大学論集第24巻第3号（1978年3月）

- p. 73 下から9行目 brind → bring
 p. 106 上から10行目 1825年 → 1875年
 “ 上から16行目 「天上之友」 → 「天上之友」第二篇
 p. 107 最終行 昭和54年 → 昭和51年